

令和2年度 研究評価報告書【水産試験場】

1 概要

試験・研究開発の一層の効率化と研究ニーズに即応した新技術の早期開発を図るため、「福井県農林水産試験研究評価実施要領」および「福井県農林水産業活性化支援研究評価会議設置要領」に基づき、研究課題の選定、進捗状況および進行管理、研究成果および研究終了後の成果の普及状況等について検討・判断された。

(1) 開催日時 令和2年8月20日(木) 13時30分～15時45分

(2) 開催場所 WEB会議：水研機構(新潟)、県立大学(小浜)、県水産課(福井)、
県水試(福井、敦賀、小浜)

(3) 評価会議出席者

① 評価委員

横山 芳博	福井県立大学海洋生物資源学部 学部長
永澤 亨	国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所 新潟拠点長
平野 仁彦	福井県漁業協同組合連合会 代表理事会長
原田 進男	福井県内水面漁業協同組合連合会 代表理事会長
山本 博史	福井県海水養魚協会 会長理事
子末 とし子	福井県漁協女性部連合協議会 会長理事
石田 敏一	福井県農林水産部水産課 課長

② 水産試験場

鈴木場長、山田部長、矢野所長、石本所長、吉村室長、松崎研究指導監、担当職員

2 評価範囲

(1) 事前評価

・里海湖の水産資源回復に関する研究

(2) 事後評価

・磯根漁場の機能回復技術に関する研究

3 評価結果

課題評価は、研究課題ごとに担当者から研究の背景、目的、内容、実施方法および成果などについて説明を行った後、委員との質疑応答により評価を受けた。

各研究課題についてA～Eの5段階で評価し、さらに指導、意見をコメントとして受けた。

総合評価については次のとおり。

事前評価 : 1課題 B評価

事後評価 : 1課題 A評価

研究課題別の詳細は、研究課題別評価結果に記載し、今後の研究開発の推進、成果の普及方法等に活用する。

4 研究課題別評価結果

【事前評価】

1	研究課題	里海湖の水産資源回復に関する研究	総合 評価	B
	研究期間	令和3～6年度		
	研究目的 および必要性	三方五湖におけるワカサギ資源の減少要因の解明と効果的な発眼卵放流技術の開発を行う。		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・再生産の場所や餌・移動などの基礎的なデータ集積を行ってほしい。 ・福井の観光地である三方五湖の観光活性化と漁業の振興に向けた取り組みとして評価できる。 ・ワカサギの資源が激減とあるが、昭和56-63年に特異的に漁獲が多かったとの見方もできる。この時期の増加要因と対比することも必要か。併せて漁獲努力量の変化も把握したい。 ・三方五湖でも、三方湖は淡水、他はほぼ汽水と理解しているので、それぞれ異なった対応が必要だろう。特に水月湖は底層が無酸素化しているので、環境に合わせた対応が必要か。 ・既存の知見が少なそうなのが気になる。三方五湖のワカサギは湖内残留型のみなのか、溯河回遊型もそれなりに多いのかも要確認。 ・産卵場所が推定されるなら、耳石標識魚の追跡に加え、水路・河川での流下仔魚のトラップ調査による発生量の年変化把握も有効か。 ・資源変動の要因解明には多くのデータ集積が必要で資源回復手法の提言までにはかなり時間と労力がかかるように思われる。 ・ワカサギ遊漁の振興には方向性の整理（三方五湖の魅力とどう組み合わせるか？）が必要と思慮。 ・長期間継続して放流しているにもかかわらず資源量が増加しない要因解明を期待する。 ・新しい手法として環境DNAによる分布調査に取り組むことにより、既存調査以上の研究結果を期待でき、最適な環境や放流手法の確立によりワカサギ漁の復活を望む。 ・過去に多く生息していたワカサギの減少要因解明の観点から研究を行うことは、湖沼の内水面漁業に必要不可欠なことであり、研究成果により早期に漁場改善し、ワカサギ資源を有効に活用することで河川のほか湖沼でも他県と競合していけることから大いに期待する。 ・研究価値があり、三方五湖の環境がワカサギに適しているのか調査してほしい。 ・ワカサギが三方五湖での育成を確認するため、ワカサギの湖面養殖や三方五湖で飼育した上で放流する等の実証試験を検討してもよいのではないか。 ・ワカサギの遊漁は寒地を思わせるが、年代問わず好まれる魚であるため本研究に期待している。 ・湖沼漁業、地域振興を目的に過去に漁獲量が多かったワカサギにスポットをあてて研究に着手することは良い。 ・研究成果についてはワカサギのみに限定されることなく湖沼の水産生物全体に波及するようにしてほしい。 		

【事後評価】

1	研究課題	磯根漁場の機能回復技術に関する研究	総合 評価	A
	研究期間	平成27～31年度		
	研究目的 および必要性	「バフンウニの地蒔き式養殖」の実用化に向けた取り組みと、生産力の乏しい海域の漁場環境を人為的に改善してその効果を検証し、普及性のある手法を開発して、磯根資源の回復を図る。		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・バフンウニ漁を継続していくには、海女と協力して漁場を具体的に守っていくシステム化していくことが重要である。 ・越前うには経済的効果だけではなく、文化を守るためにも、今後も研究・増養殖の対象として行ってほしい。 ・地域の特産水産物・伝統漁法の保存に加え、夏季の高水温化による磯根漁場環境悪化の影響緩和に向けた技術開発としても評価できる。 ・試験期間の漁獲量増加には繋がらなかったが、好適漁場の選択により回収率の安定化が図れている点は評価できる。 ・各地先により抱える問題が異なっているが、地先ごとの対応とは別に、県全体での磯根漁場の管理方策の検討も重要と思う。ムラサキウニ等の大量発生も原因の一つで藻場の縮小・消失している海域も多い。そのような海域と三国沿岸等に見られる海藻の過剰繁茂海域とセットでの対策も将来検討してほしい。 ・バフンウニの地蒔き式養殖手法を確立したことは評価できる。 ・漁場環境の改善が難しい場合もあるため、放流だけでなく養殖などの新たな取り組みについて検討してほしい。 ・バフンウニに限らず今後も時代に即した効果の高い放流手法の開発を期待する。 ・今後とも研究を熱心に続け、研究成果を漁業者へ還元させてほしい。 ・バフンウニの地蒔き式養殖は観光PR、文化的利益も大きい。 ・海女の高齢化に伴う、若い方の育成が必要である。観光PRを鑑みて、見せる漁業など観光PRも検討してほしい。 ・漁場が浅場のため、近年の温暖化による高水温下によりバフンウニの生育が厳しい状況となることが懸念される。 ・当初目標の水揚げ量・額には達していないが、地蒔き式養殖の実用化は素晴らしい成果を上げた。引き続き、藻刈による漁場改善技術の普及、漁場の持続的な利用促進を行ってほしい。 		